

# 木材研究者、家具職人らが集結 順調稼働「白樺プロジェクト」



「高原の貴公子」と呼ばれる白樺

樹皮が雪のように白く、高原の白い貴公子、と呼ばれる白樺。資源として豊富で、また樹皮から幹まで多様な活用ができることに着目した「白樺プロジェクト」（鳥羽山聡代表）の活動が順調だ。旭川と近郊の木材研究者や家具職人、林業家などが集り、それぞれの専門分野において地道な取り組みを進めている。

業に呼びかけて誕生したのが「白樺プロジェクト」。東川町で家具メーカー「木と暮らしの工房」を運営する鳥羽山聡さんが中心となり、旭川と近郊の木材研究者や家具職人、林業従事者などで18年11月に活動をスタートさせた。プロジェクト第1弾となったのが、19年6月に旭川デザインセンターで開催された家具とデザインの祭典「旭川デザインウィーク」への出展。白樺を使って製作した家具や籠、食器に加え、飲料用の樹液や、樹液で作った化粧用品なども販売し、樹皮から幹、樹液まで木をまるごと一本使える可能性の広さをPRした。

## 森の再生を目指す

プロジェクト始動から1年。各分野のメンバーが新たに加わり、それぞれの専門分野で挑戦を続けている。

家庭用の家具や建具として白樺材の可能性を模索するのが美瑛町字朗根内に「樹凧工房」を構える家具職人の杉達浩昭さん(50)。3年前、白い材質の木を探していた矢先に秋津さんが手がけた白樺の家具に出合い、興味を惹かれて試作を繰り返してきた。

初の試作品となったの

## 豊富な資源

白樺は、カバノキ科カバノキ属の樹木。春の新緑の美しさで知られる北海道を代表する広葉樹だ。上川エリアでは、北海道自然100選に選ばれた白樺街道が有名で、1926年の十勝岳噴火泥流跡に自生した白樺が白金温泉までの約4キロにわたって続いている。

資源量が豊富で、道内の民有林の5割を超える面積を占めるほどだが、幹が直径30センチ程度と細く、またやわらかな材との印象から、家具や建材には不向きとされて、伐採されたほとんどが製材用のチップとして使われてきた。

素材としての評価は低かったものの、資源の豊富さと、他の広葉樹に比

べて成長サイクルが早いことに注目したのが道立総合研究機構林産試験場の秋津裕志主幹。2015年にその活用方法を模索する研究に着手し、旭川工芸センターと連携して白樺を使って食卓や椅子などを製作し、家具として十分な強度を保てることを確認した。

白樺の可能性を実感した秋津さんが、地元の企

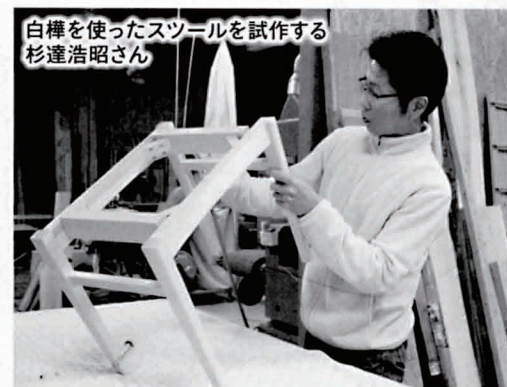
がダイニングセット。同会のメンバー(左写真)の一人で、自伐型林業に取り組んでいる清水省吾さんとともに市内の山に入り、直径約30センチの白樺の木を入手。縦150センチ、幅85センチのテーブルと、椅子4脚を完成させた。

「作り方は一般の家具と同じですが、白樺は白だけではなく赤い色合いも出るので意識的にデザインしました。また、白樺の特徴でもある樹皮をさりげなく残す作り方をしました。お客様からは『白樺は白いイメージがあるけれど、赤が混じっている面白』『いい表情をしている』などのお声をいただきました(杉達さん)。

現在は、東川町で建設中の一般住宅において、白樺材を使って建具

を製作中。滅多にない直径40センチほどに育った良質の白樺を用い、住宅内部のドアを手がけた。今後は、美瑛町のふるさと納税の返礼品として白樺を使った木製品の製作を考えているそうだ。

白樺を使った家具製作に加え、杉達さんが力を入れているのが白樺プロジェクトの意義を広く伝えること。白樺を使い続けることで、資源が枯渇しつつあるスギやタモなどの広葉樹を守り、環境保全につながることも同会の活動の大きな柱となっており、家具製作を通じて広くアピールする考えだ。



白樺を使ったツールを試作する杉達浩昭さん



白樺で製作したダイニングセット

「針葉樹人工林の皆伐跡地などに人の手をわずかに加えることで、白樺の更新を後押しし、広葉樹の森を再生することがプ

ロジェクトの目的のひとつです。白樺の場合、直径13センチから24センチ未満の大きさの材が全体の6割を占め、24センチを超える材は1割に過ぎません。それでも山の諸条件が良ければ、径の大きな材の割合を増やすことは可能です。

白樺は、樹皮から幹まで丸ごと一本を使うことができ、樹皮や樹液、葉までも活用することで収益源を生み出し、持続可能な林業経営が望めます。白樺の利用を続ける間に、枯渇してしまったナラやタモの成長を待ち、森を本来の姿に再生させる事を目指します(杉達さん)。